

# カミュ『異邦人』における「無関心」

鈴木 忠 士

## 第Ⅴ章 自然的世界

### 予備的考察

#### 1 生と死の弁証法

##### A. 生肯定的自然

##### B. 生否定的自然

###### a. 感 覚

……（以上、本誌前号）

###### b. 性 愛

###### c. 睡 眠

###### d. 活 動

###### e. 価 値

##### C. 生と死の統合

#### 2 死の願望と死の不安

##### A. ムルソオの身体像 ……（以上、本号）

##### B. 異形の身体

##### C. 生命的身体

##### D. 共生的身体

##### E. メランコリー

## 第Ⅴ章 自然的世界

### 1 生と死の弁証法

#### B. 生否定的自然（つづき）

##### b. 性 愛

性愛における情愛性の後退と、それと反比例の関係にある破壊的な攻撃性の

前景化は、ムルソオにとって親和的な間柄の人間に対してすら起っている。ムルソオは逮捕の後しばらくしてマリーの面会を受ける。「僕は真向いにマリーが縞の服を着、日に焼けた顔をしているのに気付いた。〔……〕広間にはいったとき、大きなむきだしの壁からはねかえってくる声のざわめき、空からじかに注がれ、部屋のなかに迸る強い光のために、僕は一種のめまいを覚えた。僕の独房のほうか暗くて静かだった。〔……〕僕は彼女を実に美しいと思った〔……〕彼女をながめて、服の上から彼女の肩をだきしめたいと思った。僕はその細かな織目に欲情を感じたが、そのほかに何を望んだらよいのかわからなかった。〔……〕僕にはもう彼女の歯の輝きと眼の小皺しか見えなかった。〔……〕僕はすこし気持ちが悪くなって、出て行きたいと思った。騒音がやりきれなかった。しかし一方では、マリーのそばにいられるのをたのしみたかった。〔……〕マリーは僕に接吻する身振りをした。〔……〕彼女は身動きをせず、顔を格子で押しつぶしうにして、相変らず引き裂かれ痙攣したような微笑をうかべていた。<sup>(204)</sup> (傍点は鈴木、以下同じ)」

始めのうちムルソオはマリーをその姿態全体において把え、「美しい」と情意的な対象構成を行っているが、次第にマリーは単に「欲情」を喚起するだけの刺激源でしかなくなっていく。こうした意識領野の狭搾の理由を、「若い」囚人ムルソオの鬱積した「欲情」にのみ求めてはなるまい。というのも、この現象は不快感の増大と平行して起っているからである。「一種のめまい」の後に、<sup>(205)</sup> 環界の不快感刺激に「慣れる」が、しかし結局「すこし気持ちが悪くなって、出て行きたいと思」うほどになる。「広間」を出て、行くところは勿論「独房」でしかない。この「独房」は広間と対照して「暗くて静かだ」と言われているが、これが接見室に足を踏み入れた瞬間に洩された感想であるということは、この感想によって単に独房生活の結果不快刺激に対するムルソオの耐性が低下したことが示唆されているのみならず、ムルソオの心の引き籠りもまた暗示されているのである。マリーに対して彼は「自分を開」くことはできず、話に相槌を打つとしても、それは「ことさらに何かを言うため」<sup>(206)</sup> でしかない。マリー

が「欲情」の一刺激源に還元されてしまっているとすれば、当然彼女はムルソオの意識全体を占める対象とはなりえない。「閉ざされた心」を背景とする意識の外界把握のひとつの様式は「観察」<sup>(208)</sup>である。ムルソオの視覚と聴覚の注意は絶えずマリーから逸れて周囲の対象へと拡散していくのである。

気分が悪くなるとともに、マリーに実在感を与えそこにムルソオの関心を惹き付けていた唯一の動機としての「欲情」も当然後退する。それと平行して自己愛的自己保存の衝動が前景化して外界への関与が撤去されたので、「それからどれだけの時がたったのか僕は知らない」<sup>(209)</sup>とムルソオは言うのである。これに続く叙述は急坂を一気に下るにまかせるような印象を与える。丁度埋葬の日の叙述で、「不眠の一夜の疲労」を語った後、「僕はもう何も思ひ出せない」<sup>(210)</sup>として、記憶に残るいくつかの「印象」を羅列的に記述して主体の関与を失った時間がいかに早く過ぎ去っていくかを示したように。こうした文脈からみると、ムルソオが口にする「マリーのそばにいられ」る「たのしみ」とはもはや情性的ものでしかないと言える。そして不快刺激による環界支配と主体の引き籠りを、即ち自己保存の衝動の前景化と情愛性の後退を契機として、エロスの統合から解離した生の攻撃性<sup>なま</sup>、即ち破壊的衝動が顕在化するのである。こうした背景のもとに初めて「引き裂かれ痙攣した微笑」というような破壊的なイメージが了解可能なものとなるのである。

生肯定的自然下の性愛とは、他者と「氣」(「満足」)において「一致」し、そこから自からまた根元的氣としての世界との「一致」を体感する場であった。しかし、独房における「女にたいする欲望」は、他者へさらには世界へと人を導く契機とはならず、人を「錯乱」という閉ざされた妄想的世界へ陥れるそれ自体が不快な刺激源となる。個我が世界へと開けていくのではなくして、世界が個我の妄想に封じ込められるのである。「あまり女のことを、多くの女、僕の知ったすべての女を、彼女らを愛したすべての状況を考えたため、僕の独房はすべての顔でみたされ、僕の欲望はそのなかでうごめいた。」そして、この不快な刺激源としての欲望は、一方ではただ「自分で始末をつける」べき厄介

物となるし、他方では「時を殺してくれ」る方便ともなる。<sup>(211)</sup> いずれにしる性愛はその本来の対象志向性、他者や世界を志向する機能を否定されているのである。

性愛の構成要素としての情愛の可能性が否定され、そこから「仕末をつける」べき「欲情」のみが、<sup>なま</sup>即ち生の性衝動が解離してくるところでは、他者は欲情を刺激し且つその放出路を約するかに見えるだけの身体、実存を背景としてもたない任意の官能的身体に還元される。更にこの身体が絵に画いたモチにすぎず人を遂には「錯乱」させずにはおかない不快な刺激源であるとき、人は断念によってこの刺激源から自らを遮蔽し、<sup>なま</sup>且つ生の欲情のもつ恣意的な対象志向性を自己自身へと反転させる。このような状況において、かつて性愛の対象であった他者が、一個の無名で無用の身体に還元されるとしても不思議はない。

死刑の判決が下り、今や処刑の朝を迎えるばかりとなったムルソオは「久々に」マリーを想起して思う、「病気かもしれないし、死んだのかもしれないという気もした。当然の成行だった。どうして僕にそれを知ることができようか、いまは離されてしまった二つの身体 (corps) のほか、僕らを結びつけているものは何もないのに。それに、このときからマリーの記憶〔思い出〕は僕の関心をひかなくなったようだった。<sup>(212)</sup>」ここにおいてもはや「身体」(corps) は物体 (corps) に過ぎず、物体間には物理的な接触を超えて互いを「結びつけているものは何もない」のである。空間的に隔てられた今、二つの物体は勿論「共通の気の場所」など持たず互いに「何の関係もない」ので、「記憶〔思い出〕は無用の長物と化す。こうして、ムルソオはマリーを「心の中で殺した」のである。既にマリーの「身体」は死体 (corps) になっているのである。だから、上の引用箇所が続く所で「死んだのなら、もう僕には興味はない」とムルソオは言っているが、<sup>(213)</sup> こうした文脈からみれば、「生きていても」と言うべきところであろう。

外界の対象への性愛的関与の撤去に伴って、直ちにその対象が物体としての

身体へ、物体としての死体へと還元されていることは注目に値する。より正確には性のエネルギーと情愛性の撤収が即対象の生の否定、死の蹂躪をもたらしているのである。これは既述の生の本能(エロス)の四位一体構造に照して、性の衝動と情愛性の後退とともに生の攻撃性が解離し専制的な支配を揮っているものと解される。

また、性愛的関与の撤収と平行して人間的世界一般に対する関与の撤収が起っていることも注目される。マリーに「もう興味はない」と言ったあとで、「彼ら〔人々〕はもう僕とは何の関係もない」とムルソオは続けている。この意味において、ムルソオにあっては、性は即生であり、性愛は即愛であると言える。それほどムルソオにとって性愛のもつ意味は大きいのである。生(エロス)の四位一体構造から言えば、性を中心としてみた生、即ち性愛(狭義のエロス)への偏向があると言えよう。

ともかくもこのようにして、ムルソオ自身もまた世界に対しては一個の無名の物言わぬ身体=物体となり、あとは物体=死体に成り果てるのを待つばかりなのである。

### c. 睡 眠

不快な刺激に囲まれた中でも人は眠りに落ちることがある。識閾を下げて生体を保護するためである。従ってこの眠りは生肯定的自然下のそれとは違って、心を閉じたままの眠りである。

養老院へのバスの中で、「たぶん急いで駆けたのが原因で、それに車の動揺、ガソリンの匂い、道路の照りかえしなども手伝って、僕はうたたねをしてしまった。目的地につくまで僕はほとんど眠っていた」、目を覚ましたムルソオに「軍人」が話しかけるが、ムルソオは「あとで喋らなくてもすむように《ええ》<sup>(215)</sup>と言った。」この素っ気無さは相手が軍人であるということにもよるが、同時に不快な環境刺激下の眠りの後であるということにもその理由がある。

通夜を「不眠の一夜」とムルソオは言っているが、それでも幾らかは眠っている。最初のまどろみは、「白い壁の上の、光のきらめき」という不快刺激があ

ったとはいえ、他のより多くの快刺激に助けられて快適なものとなった。ところが、それを妨げられるとともに不快刺激の増大が意識され、その後の断続的なまどろみは世界に開かれた目覚めをもたらさず、対象世界への情愛的関与は撤収され、代って破壊的攻撃性が前景化する。「僕はもうねむくなかったが、疲れて腰がずきずきした。いまではこの連中の沈黙が僕には苦痛だった。〔……〕僕は彼らの真ん中に横たわっているこの死人が、彼らの眼にはなんの意味も持たないのだという印象<sup>(216)</sup>をうけた。」「死人」はそれ以前にムルソオ自身にとって「意味」を失っているのであり、解離した攻撃性は、ここでは情愛性を欠いた他者を表象させ他者と「死人」(母)との情愛的関係を断ち切るという形で表われている。次いでこの破壊的衝動は他者に投影され、他者が自分を攻撃してくるといふ被害妄想的心象を構成させる。「ふと眼をあけると〔……〕ただひとりだけが、〔……〕まるで僕が眼をさますのだけを待ちうけているように、じっとこっちを見つめていた。<sup>(217)</sup>」こうして破壊的衝動は顕わになるに従ってムルソオの心を凝らせ、世界とのどのような親和的係わりをも感受する能力を麻痺させ、遂には他者を「心の中で殺すに至らせる。「腰の痛みがだんだんひどくなるので眼がさめた。〔……〕この苦しい通夜のおかげで、〔老人達は〕灰のような顔色をしていた。出て行くとき、まったく意外なことに、彼らはみな僕と握手した。——まるで互いに一語もかわさなかったこの一夜が我々の親しみ<sup>(218)</sup>をましたかのように。」「灰のような顔色」とは死相の色である。「死人」が老人達の「眼にはなんの意味も持たないのだ」という「印象」をムルソオがもったとすれば、それと表裏のこととして、このムルソオの「眼に」は生ける屍と映っていると言ってもよい老人達も「なんの意味も持たない」物体=死体なのである。物体=死体との一夜が「親しみをました」筈はなく、あまつさえ「握手」を求めてくるとすれば、それは「まったく意外なこと」に違いない。

通夜では、それが「不眠の一夜」と言われているように、ムルソオの睡眠・覚醒のリズムは乱れている。犯行当日の朝、「僕は容易に眼がさめず〔……〕身体が空虚になったようで、少し頭が痛かった」、マリーはムルソオの顔を見て

「むっつりした顔」をしていると言った。<sup>(219)</sup>それは頭痛と「疲れ」のみを残す眠りであり、ここでも心身の平衡が失われていることが睡眠・覚醒のリズムの乱れとして現われている。また、予審時代の刑務所では「はじめは、夜よく眠れず、昼間は全然だめだった。少しずつ、夜がよくなってきて、<sup>(220)</sup>昼も眠れるようになった。最近の数ヶ月は、毎日十六乃至十八時間眠るといえる」と、判決後の独房では逆に「僕はただ日中に少し眠るだけにして、夜は夜通し、空の窓ガラスの上に光が生れるのを辛抱強く待つようになった」と言っているように、不眠から嗜眠へそして再び断続的な睡眠へと移行しているが、いずれにしる睡眠・覚醒リズムが崩れていることに間違いはない。そしてこれらの睡眠の障害が身体機能の不全感を惹き起こす。そこから、一方では外界からの情愛的関与の後退が、同時に攻撃性の解離とその破壊衝動化が出来し、他方では不快刺激に対する耐性の低下が生じて、この揺動する悪性の攻撃性の放出を容易にする。「昼の意識が識別をこととするのに対して、夜の夢は、形象化作用を通して類似において事態をとらえてゆく。そしてより厳密に見ると、夜の眠りと夢の世界の背後にも、意識の識別性がうごめいており、これは昼の意識の世界の背後に、夢の世界が、いわば想像力として、働いているのとまさに対照的なことである」<sup>(222)</sup>とされているが、本章の『予備的考察』で述べておいたように、『異邦人』の世界からは「夜の夢」は跡形も無く排除されており、この排除された夜の夢は、夢が夢として見られず「眠りが眠りとして機能してない」場合には、それだけ一層「昼の意識」の中に侵入するであろうし、「昼の覚醒と意識が、識別作用の減弱と夢的形象化作用の侵入により変質する」<sup>(223)</sup>であろう。睡眠障害をひとつの原因として顕在化した破壊的攻撃性を帯びた知覚は、迫害・被害妄想的な対象構成をすることになるが、このことは養老院での通夜や犯行の場面におけるルムソオの知覚の対象構成の記述において確認されたことである。睡眠障害が慢性化していると思われる予審期間や公判中及び判決後の独房生活においても、一見したところではそうは見えないが、やはりこうした妄想形成は認められるが、今は指摘に止め、それは本章の第3節で詳述することとする。

#### d. 活 動

明るい気分<sup>(224)</sup>に浸された活動性は、内と外の自然の律動性に則した活動性であり、世界と親和的關係を形成する契機である。このことはムルソオの様々な遊びや労働の記述の過程で確認されたことである。暗い気分<sup>(225)</sup>に浸蝕された活動性は、調和や律動性を失い、極端な活動から極端な停滞へと揺れ動く。それは又、積極的か消極的かの差はあっても、世界に心を閉じさせ敵対させる活動性であり、究極のところ他者に対しても自己に対しても死をもたらず活動性である。

世界に積極的に敵対する活動性の典型的な表われは、殺人と、司祭に向けて示された激昂である。犯行が世界との全面的な敵対關係を背景として起っていることは既に指摘した通りである。司祭に対して示した激昂のなかでも、「すべての人間は特権を持っている。特権者しかいはしない。他の人々もまた、いつか死刑を宣告されるだろう」とムルソオは言<sup>(225)</sup>って、恰も「たったひとつの運命<sup>(224)</sup>」に「なり代った」かのようにすべての人間に死の重科を科すのである。

これと反対の極にある、活動性の停滞の指標は倦怠感である。「今日は日曜日だと思って、うんざりした。日曜日は嫌いなのだ。〔……〕十時まで眠った。それから、やはり横になったまま、正午まで、煙草をすっていた。いつものとおりセレストで昼食はしなくなかった。きっと彼らに質問されるだろうが、それがいやだった。〔……〕昼食のあとで、僕は少し退屈して家のなかをぶらぶらした。〔……〕今では僕には広すぎるので、〔……〕僕はもうその〔僕の〕部屋でしか暮していない。〔……〕所在なさをまぎらすために、僕は古新聞をとりあげて、読んだ。〔……〕結局、バルコニーに出た。」ムルソオはそこで宵まで居て、同じ人々が街から出かけて行ってまた帰ってくるのを眺める。「僕は、人間と光にみちあふれた歩道をこうして眺める眼の疲れを感じた。〔……〕僕は下に降りてパンとマカロニを買い、自分で料理して、立ったまま食べた。〔……〕僕は思った、相変らずの日曜日がやっ<sup>(226)</sup>と終わった」と。ムルソオは人との接触を避け、自分の寝室という狭い場所に生活空間を縮小し、街には買物に一度降りるだけで、なにをするでもなく一日を過ごし、更に「疲労」を訴えている。活動

性の著しい低下と、その背景にある倦怠の気分(「退屈」)は明らかである。また倦怠の気分にある人は概して対象世界を同一事象の反復として表象するものであるが、ムルソオの眼に映る街路の光景においても同じことが繰り返される。

根本的とも言えるムルソオの倦怠感は様々なところで様々な形で顕われている。「僕は眠かったが、立ちあがるのが苦痛だった。疲れた様子をしていたらしく、<sup>(227)</sup>レエモンに、しっかりしなければいけないと言われた。」セレストの店で夕食を摂っていると「自動機械」のような女が同席し、「何もすることがなかったから、僕も外に出て、しばらく跡をつけた。」<sup>(228)</sup>それから帰ってサラマノの話<sup>(229)</sup>を聞いてやるが「彼には少しうんざりしていたが、僕は何もすることがなかったし、眠くもなかった。会話を続けるために、僕は彼の犬のことをたずねた。」<sup>(229)</sup>犯行のときは「頭の中で太陽が鳴り響いて、骨を折って木の階段をのぼったり、また女どもと話をするのかと思うと、意気が萎えてきた。〔……〕ここに止っているのも、出かけるのも、結局同じこと」<sup>(230)</sup>だと考えて浜辺に戻るのである。

予審期間中の独房では、「毎日十六乃至十八時間眠り、<sup>(231)</sup>「あとの六時間を、食事、用便、回想、チェコスロヴァキアの話などで消せばよかった。」<sup>(231)</sup>ムルソオは「思い出すことを覚えた瞬間から、まったく退屈しなくなりました」と言っているが、こうした言葉の裏に根深い倦怠感をみてとることは容易であろう。この倦怠の気分故に彼は「時間の観念を失って」しまい、過ぎ去った「五ヶ月」は、「それは絶えず独房に波のように打ちよせてくる同じ日々であり、<sup>(233)</sup>同じ作業の追求であった」と言うのである。

公判では、最初のうちこそ「人々の関心をひくこと」に「興味」<sup>(234)</sup>を覚えたものの、「すぐ飽きてしまっ」<sup>(234)</sup>て、「法廷をひどく遠く感じ」<sup>(235)</sup>るようになり、遂には「僕は何もかも色の褪せた水に似たものになってしまい、そこで眩暈を感ずるような印象をうけ」<sup>(235)</sup>るに至るのである。そして「僕がここでしている無益なことのすべてが、咽喉につきあげてきた。僕はただひとつ、このお喋りが終っ」<sup>(236)</sup>て、自分の独房に戻って眠ることだけが待ち遠しかった」とムルソオは言う。

根本的な倦怠感是世界への関与をすべて撤収させるので、世界は対象構成さえされることなく、一切は等価となり、「めまい」をあたえる混沌と化すのであろう。また、一切の活動は「無益」と映るであろうし、活動性の停滞の極みとして生活空間を独房へと縮小することが志向され、遂には眠りによって最少限の生活空間としての自己の身体の内への引き籠りが切望されるのである。従ってこの場合の眠りも本来の機能を失った、世界から心を閉ざすための眠りである。

予審期間中の刑務所生活では未だ「中庭でする毎日の散歩<sup>(237)</sup>」があった。しかし死刑判決が下った後は、ムルソオの外的活動性は一切停滞し、「横になり、空を眺め、そこに興味をもとうと努力した<sup>(238)</sup>」と言うほどに活動性は内向し、内省と化している。しかもこの内省の目差すところは、「猛り立つ血と肉体を宥め<sup>(239)</sup>る」こと即ち活動性の徹底した断念なのである。こうして死刑囚ムルソオに残された唯一の活動性とは、己れの死を待ちうけ、己れの死を成就することだけである。つまり、「夜半すぎると」、「待ちかまえて、様子をうかが<sup>(240)</sup>」い、「たとえ、ごくかすかな軋みにも戸口へとんでゆき、扉の板に耳をおしつけ、夢中で待ちうけ<sup>(241)</sup>」ることであり、その果てにある処刑台で「慎ましやかに、少しはにかみながら、きわめて正確に、殺されてゆく<sup>(241)</sup>」ことだけである。

さて、不快刺激に対しての耐性の低さや、睡眠の障害、活動性の激発と停滞、倦怠感などはその都度の心理状態を背景として考慮に入れなければ十分な了解が困難であることは勿論であるが、既に不快な視覚感覚を記述する際に指摘しておいたように、それらはムルソオの心身を全体としてみたときそこに潜むある種の脆さを推定させもするのである。ムルソオ自身、「肉体的欲求に精神を乱されやすい性質だ<sup>(242)</sup>」と言っている。これが事実であることを端的に示す例として、環界に快刺激が支配的であろうと不快刺激がそうであろうと、いずれにしろ他の登場人物に比べ余りにたやすくと言えるほどムルソオが放心したり、気を失ったり、眠ってしまったたりすることを挙げられよう。このムルソオの心身全体が孕む脆さは、身体的なレベルでは、心氣的ともいえる自己の体調の異

常性についての過敏で過剰な意識となって表われてくることが予想される。実際、これまでの様々な引用例においても既に明らかであるが、こうした心氣的愁訴に類似のものが、作品全体を通してみると、第Ⅰ部のⅣ、Ⅴ章と第Ⅱ部の最終章を除く爾余の八つの章において様々な切っ掛けのもとに現われているのである。今は、心身全体としての不調感を端的に表現する疲労を表わす言葉、即ち「疲れ」(fatigue)、「疲れる」(se fatiguer)、「疲れた」(fatigué)をムルソオが口にしている所だけ拾い出してみると、「光のきらめきが僕を疲れさせた」や「疲れて腰がずきずきした」にはじまって作品全体で<sup>(243)</sup>12箇所あり、章によって疲労が訴えられる回数に差があるが、作品全体で心氣的訴えが認められる総計8章のうち疲労が訴えられていないのは唯第Ⅱ部第Ⅱ章のみであり、しかもそこでも「少し気持が悪くなった (un peu malade)」とむしろ訴えの度合いとしては疲労より強いことが言われているのである。ともかく、この程度の長さの物語で主人公が自分の疲労をこれだけ繰り返して訴えるのは特徴的なことと言えるであろう。

#### e. 価値

「人生は生きる労をとるに値しない」とムルソオは真っ向から生の価値を否定<sup>(244)</sup>する。というのも、生を待ちうけるものは、「たったひとつの運命」としての死しかないからである。死は一方で自分の現在の生活のすべてから「重要性」を奪い、過去の生を「馬鹿馬鹿しい」(absurde)ものとし、未来の「まだこない年々」を「現実性の」ないものにし、<sup>(245)</sup>「根本において、三十歳でも七十歳でも死ぬのに大して変りはない」<sup>(246)</sup>とムルソオに言わせる。他方、他者の人生はといえば、「人々の選ぶ生活、選択する運命などが何だろう。たったひとつの運命が僕自身を選び、僕とともに幾百万の特権者を選ぶはずである以上。」<sup>(247)</sup>こうして、自他を問わずどのような形の生であろうと、死という「暗い息吹き」がそこから「重要性」を奪い、<sup>(248)</sup>「すべてを同等の価値にしてしま」うのである。この「等価値」<sup>(249)</sup>は、生肯定的自然下における「すべての人生は優劣のないものだ」という主張にみられるのと同じ等価値性の主張ではあるが、正負の方向を異にす<sup>(250)</sup>

る。前者はすべての生の営為は「無益」だという意味での、負の等価性であり、後者は、逆にすべての生活は各々独自の価値を有するという意味での正の等価性である。

さてこうして自他の人生のもつ本来的な「馬鹿馬鹿し」さが導き出されると、生きていることそれ自体も又「重要性」をもたないことになる。自他の生を抹消する行為も、生の営為が全体として負の等価性を刻印されている以上、なんら非難に値しないものとなる。「すべては許されている」<sup>(251)</sup>ことになる。アラブ人を前にしてムルソオは「撃つことも撃たないこともできる。どっちでも同じことだ」と言った。そして、死を眼前にした今、「他人どもの死が〔……〕僕にとって何だろう」と言う。また、自己の生も、「人が死ぬ以上は、いつどうしてということは大した問題ではない」<sup>(253)</sup>のだから、「死刑を執行されたとしても、それが何だろう？」<sup>(254)</sup>

### C. 生と死の統合

前二項を比較対照してみると、〈感覚〉から始まり〈評価〉に終る二つの系列の生の、あるいは生と死の対立は著しく、明らかに相容れる余地はまったくない。それがムルソオの「魂」の世界に顕著な葛藤の両極構造をもたらしているのである。ところが既述のように、物語の大詰めにおいては一挙にして生と死の統合が果たされる。生と死の相拮抗する二つの原理が癒し難い分裂をもたらしていると思われるムルソオの心的世界を辿ってきた読者には、いささか唐突の感を免れない結末と言わねばならない。

生きることの意志と死の受容がもたらす世界との調和的統合の体験は、ムルソオ自ら言うように、司祭に向けて爆発させた「大きな怒り」によって彼の身内の「悪」（鬱積した破壊的攻撃性）が「浄化」<sup>(255)</sup>され、カタルシスが起った結果であると説明することもできるだろう。だがその場合、より大きな心的過程の一環としてこの浄化作用を捉えない限り、ムルソオの主張する「幸福」は破壊的攻撃衝動が再び昂まるまでの小康状態にも等しいものとなり、彼の至り得た

カミュ『異邦人』における「無関心」(鈴木)

この境地も「真面目さを大きく阻害<sup>(256)</sup>」されることとなろう。又、突如としてムルソオに「悟り」(illumination<sup>(257)</sup>)が開けたのだとしても、それをデウス・エクス・マキーナに終らせないためには、「悟り」に至るまでの過程や「悟り」の内容そのものが問われなければならないだろう。

死刑判決が下った後の死刑囚ムルソオが自己の理性と意志の一切を賭けて生と死の矛盾に立ち向かっていることは誰の目にも明らかである。結末において彼が語る生と死の統合体験に安直な解釈を急ぐよりも、先ず彼の思索の過程を辿り直すことが、彼の精神の「浄化」と「悟り」を定位するための、その本質の理解に至るための必須の作業であろう。

ムルソオが死の受容に至る思索の次第は次のようなものである。もし生肯定的自然の原理に従って生きるならば、人は突如として現前する死に不意打ちを食らって動物的な恐怖のままに盲動し、「自らの運命を両眼でじっと見詰める<sup>(258)</sup>」余裕はとてもない。それ故ムルソオは不意打ちを嫌う。「僕は不意打ちを食うのは、いつも好まなかった。何か僕に起こるとき、その用意をしていた<sup>(259)</sup>」

死刑の判決は死を確実に間近なものとしたが、同時にこの不意打ちに「用意」するための反省の時を、生肯定的自然 = 明るい気分と、生否定的自然 = 暗い気分という相矛盾する二つの事態を統合するために必要な時間をムルソオに与えた。判決前の獄中生活では「問題のすべて」は「時を殺すことであつた<sup>(260)</sup>」と語っていた男が、今や「時間が足りない<sup>(261)</sup>」、「もう時がほんの少ししか残っていない<sup>(262)</sup>」と言う。刻一刻に自己の生の勝敗が掛かってきたのである。

最初のうちムルソオは処刑されるという事態を容認することができない。何故なら第一に、「僕はただ人から犯人と言われたただだ。僕は有罪ということだから、償いをして<sup>(263)</sup>」と言っていることから明らかなように彼は自分の有罪性を真に自覚していないからであり、第二には、処刑の「人を馬鹿にした確実性を受け容れることはできない」からである。というのも「この確実性を基礎付けた判決と、それが宣告された瞬間からの、判決の冷酷な施行との間に

は、滑稽な不調和があったからである。<sup>(264)</sup>」 ムルソオは敵対的世界の存立基盤をなしている「信念」の、そしてそれに基づく判決の恣意性を容認し得ず、この恣意性にも拘らずそれを引き金として作動し始める制度のメカニズムの「人を馬鹿にした確実性」を否定したいと思うのである。

それではこの「人を馬鹿にした」メカニズムから逃れる術を考えるべきであろうか。ムルソオは二つの可能性を想定する。一つは脱走である。「大切なのは、脱走の可能性、非情な儀式からの逸脱、希望へのあらゆる機会を提供する狂気への疾走だ。」だが、「勿論希望といっても、街の片隅で、駆けている最中、とんでくる弾丸で倒されることでしかない。しかし、よく考えてみれば、こんな贅沢が僕に許されるわけではない。すべてが、僕にそれを禁じ、機械が僕を再び捕えてしまう。<sup>(265)</sup>」

いま一つは、上訴の成功がもたらす特赦である。この可能性を想像すると、盲目的な生の衝動、「両眼を狂気じみた歓喜で刺すあの血と肉体の猛り立つ躍動<sup>(266)</sup>」がムルソオを突き動かす。そして自由の身という架空の未来と処刑という免れ難い現実に関わられた現在の自分との比較は、彼の精神を分裂させパニック状態に陥れる。「ある日の早朝、非常線の後、いわば反対側で自由の身である僕を想像し、見に来た後で吐いたりすることのできる見物人となることを想像すると、毒々しい歓喜の波が胸に湧き上がってくるからだ。しかしそれは理性的ではない。こういう仮定に身を任せるのは間違いだった。そのせいで一瞬間の後に、僕は恐ろしい寒気を覚えて掛布団の下で縮こまった。堪えられなくなって歯をかちかち鳴らした。<sup>(267)</sup>」

万に一つの上訴が成功した場合を考えてみよう。その場合にも人はいずれ待ち受ける死との出会いを繰り延べただけである。「今であろうと、二十年後であろうと、僕が死ぬことに変わりはないのだ」から。上訴が却下された場合はどうか。「よろしい、それなら僕は死のう<sup>(268)</sup>」とムルソオも明言する。だがその場合、仮に彼が自分を馬鹿気た制度の殉教者とすることによって、自分の死を「想像力」によって美化し、制度への想像力による抵抗を試みようとしてもそ

れは不可能である。何故なら断頭台との出会いはまことに凡庸な日常性に充ちており、しかも処刑は一切の偶然を許容しない作業であって、人は唯その作業の円滑な運行を願ってメカニズムのひとつの歯車としての役割を従順に果たす以外にはないのだ。「斬首刃の良くない点は、そこに何の機会もないこと、絶対にないことに存する。〔……〕もし何かの拍子で、斬首がうまくいかなくても、やり直すだけのことだ。従って、これが良くない点なのだが、死刑囚は断頭台が具合よく動くのを希望しなくてはならない。〔……〕結局、死刑囚は精神的に協力しなければならない。すべてが円滑に進行するのが、彼の利益なのだ。」<sup>(269)</sup>「実際は、あの機械は、至極簡単に、地面の上に置かれていた。〔……〕写真に映った機械は、完成したきらきら光る精密な製品のような外見で、僕を驚かした。〔……〕機械はそれに向かって歩いて行く人間と同じ高さにある。彼は誰か人に会いにゆくようにそこに達する。それもまた厭うべきことである。台に上るのは、昇天するようで、想像力がそれに頼ることができる。ところがあそこではまたも機械がすべてを押し潰している。人々は、慎ましやかに、少しはにかみながら、極めて正確に、殺されてゆく。」<sup>(270)</sup>

翻って判決の偶然性とその実施の「人を馬鹿にした確実性」との間の「滑稽な不調和」を再考してみるならば、それは誕生の偶然性と死の確実性との間の滑稽な不調和に置き換えられうると気付く。たとえ処刑を免れても、人は死を免れることはできない。とすれば、裁判と処刑という制度のメカニズムに取り込まれ一個の「自動人形」<sup>[(271)]</sup>あるいは「ゼロ」<sup>(272)</sup>の存在に墮してしまうことなく、より一般的な見地に立って、この制度上の儀式を空洞化し、社会のためにある儀式を自己の生の補完物となし自己の生の組成分そのものに転化させることも可能となるような地平が拓かれうる筈である。

問題は次のように立て直されなければならない。即ち、生の偶然性と死の「人を馬鹿にした確実性」との間の「滑稽な不調和」をいかにして人は受容可能なものとなし得るのかと。

カミュは受容可能だという結論に至る。彼の推論の過程は次のようなもの

である。即ち、第一に、「たったひとつの運命」がすべての人を待ち受けている以上、すべての人は「死刑囚」である。第二に、すべてがいずれは無に帰する以上、「すべての人生は優劣のないものだ」、「いつどのように」死を迎えようともだ。「僕の未来の奥底から、僕が過してきたこの馬鹿馬鹿しい人生のすべての期間、ある暗い息吹きが、未だ来ない年々を通して、僕の方へ立ち登って来る。そしてこの息吹きの通過は、やはり同じように現実性のない年々を僕が生きて来た間人々が僕に勧めてくれたものを、すべて等価にってしまった<sup>(273)</sup>。」それならば、と彼は結論する、「今であろうと、二十年後であろうと」死ぬことには変りはないと。「それ故<sup>(274)</sup>」生への盲目的衝動の「叫び<sup>(275)</sup>」はこの明察の下に「窒息させてしまえば<sup>(276)</sup>」よいのだ。このようにして彼は上訴を断念するのである。

以上ムルソオが彼の所謂「論理」に従って死の受容に至る次第を辿った。彼は「〈だから〉が論理においてもつすべての意味を見失わない<sup>(277)</sup>」ために、「猛り立つ血と肉体の躍動を宥め」る。「たったひとつの運命」としての死に照らすとき、生の一切は「現実性のない」ものであるとしてこれを否定し、意識と意志のすべてを以て己が生る宿る身体、即ち内なる自然を圧殺しようとするのである。この人間の自然性への敵対と、「識別」をこととする「風の意識<sup>(278)</sup>」への精神の偏向は相関的である。判決後ムルソオは別の独房に移されるが、そこでは「寝転ぶと空が見え、又それしか見えない。」そして、「その空の顔に風から夜への色の移り代りを見ることで日々が過ぎてゆく」と言う。しかしもはや彼の心は自然には向かわず、別のところにある。彼は「寝転んで〔……〕待っている<sup>(279)</sup>」のだ、処刑の時を。そしてそれにどう対処すべきかに思念を集中している。彼の関心は挙げて内なる葛藤をいかに処理するかにあるので、行き詰まった「考えの流れを逸らそう」としてのみ「横になり、空を眺め、それに興味をもとると努力した<sup>(280)</sup>」のである。こうして彼は外なる自然から自らを疎外し、それと並行して活動性のすべてを内省のうちに封じ込め身体には活動性の欠如態としての横臥しか許さないというように、人間の自然性を二重に否定するに至るの

である。同時に、「風意識」の不断の支配下において、もはや精神には身体を介しての休息と解放が許されない。「僕は不意打ちを食うのは、いつも好まなかった。何かが身に起こるとき、その用意をしていたかった。そのために、僕は唯日中に少し眠るだけにして、夜は夜通し、空の窓ガラスの上に光が生れるのを辛抱強く待つようになった。」

かく「風意識」の君臨の下、即ち識別・論理・意志の支配の下に生の衝動は制圧され、ムルソオは「平静」を得て、「自分の内部に血液が規則正しく循環するのを感じることができた。」確かに「これは、ともかく、大したことである。」<sup>(281)</sup>しかしそれが「一時間ほど」のことに過ぎないという事実は残るだろう。すべての生体の存在にとっての基本的条件である生の衝動を「窒息」させることは、生の喜びを享受する能力を豊かに恵まれていればいるほど、そしてこれを妨害する「壁」が「狭苦しい」と「感じ」られればそれだけ一層生の衝動を「猛り立」たせ奔騰させずにはおかない筈である。事実ムルソオ自らが、「自由の身」として処刑を見にゆく自分を「想像」したときに覚えた「毒々しい歓喜」<sup>(282)</sup>を、「この先二十年の生活を考えただけで」起こる「心のすさまじい跳梁」<sup>(283)</sup>を、「特赦」を受けた身を想像するときの「両眼を狂気染みた歓喜で刺すあの血と肉体の猛り立つ躍動」を、そして司祭に「心の底」を「ぶちまけた」<sup>(284)</sup>ときの「憤怒と歓喜の入り混った激情」<sup>(285)</sup>を語っている。「当然の成行だ」と読者には思われる。というも司祭の如く「死人のように生きている」<sup>(286)</sup>わけではないムルソオにとって、生の喜びの真実性は「論理」以前の経験的事実であると読者は知っているからである。論理と意志による生の否定に対して生の衝動は雌伏するどころか逆に増々猛り狂い、破壊的攻撃性に転化することによって応えるのである。

確かにムルソオが自分を死へと追い込んでゆき、死以外には「逃げ路はない」<sup>(287)</sup>ようにしてゆく手際には詰め将棋に似た用意周到なものがある。神を「信じていない」<sup>(288)</sup>彼にとって「来世の生活」は、たとえあるとしたとしたところで、「現世の生活を思い出せるような生活」<sup>(289)</sup>に過ぎない。又「現世の生活」そのものに

しても「希望」はない。「人々が僕の死後に僕のことを忘れてしまうのも、僕はよく理解できる。彼らはもう僕と何の関係もない。」結局来世においても現世の人間の「思い出」<sup>(290)</sup>においても人は永世を願うことはできず、人生にはなんの「希望」もなく「まったく死んでしまう」<sup>(291)</sup>以外の「逃げ路」はないのである。このようにして生の営為のすべてが全き消滅としての死に至るまでの「無益な」足掻きに過ぎないとするならば、そもそもの出発点である誕生を辞むことが最良の策であろう。しかし誕生は「偶然」<sup>(292)</sup>に掛かることであり個人の意の儘にならぬ「防ぎよう」のない「不運」<sup>(293)</sup>であるとすれば、次善の策はなるべく早く無に帰することを措いて他にない。そして、自らの手で生命を断つことには「自然」な「恐怖」<sup>(294)</sup>が抗うとすれば、「偶然の結果」<sup>(295)</sup>の犯行が招いた刑死という「人を馬鹿にした確実性」をもつ死を、むしろ不幸中の幸いとして「受け容れる」べきではないか。ある実在の死刑囚は、死刑が確定した後のことであるが、次のように語ったということである。「わたしの人生はおわたんだ。もう何をしてもつまらない。何をしても無駄だ。こうやって寝てるのが一番楽だね。〔……〕寝てると時間がどんどん経っていく。それが気持ちいいね。死ぬなんてちっともこわくない。早く殺してもらいたいよ。」<sup>(296)</sup>

この実在の死刑囚とムルソオの異なるところは、ムルソオの場合死への「恐怖」が自覚されており、それとともに生の歎びへの執着が著しいことである。一方には死を受容させる論理、死の論理があり、他方にはそれとまったく相容れない、抑制されると破壊的攻撃性に転じてゆくまでの生の衝動がある。意志が後者を「窒息」させ得てもそれは一時の「平静」をもたらすに過ぎず、この均衡はいつ破れるかも知れない。この相拮抗する二つの原理の統合のために何かしら決定的な出来事の出来がまたれるのである。予審の間は「時を殺す」ことが「問題のすべて」であると言っていたムルソオが、司祭を迎えて「時間が足りない」、「もう時が少ししか残っていない」と繰り返して言う理由はこれ以外にはない。というのも既に司祭を迎える以前において、彼は論理に導かれて死の受容の結論に至り又意志によって「平静」を得られたことに力付けられて

上訴を「放棄」しているのであり、人間達の世界とも「もう何の関係もない」としてすべての関与を撤去したのであるから、時を「神のことなどで無駄にしたくなかった」とすると、もはや彼には「何もすることはない」筈だからである。

こうして、もし「小説」(roman) というものがサルトルの定義するように「長い持続を、生成を、時間の不可逆的な明白な現存を必須のものとする<sup>(297)</sup>」とすれば、この『異邦人』という物語を、サルトルの判断とは逆に又作者カミュの意向にも反することになるかも知れないが、「小説」と呼んで間違いはないことになる。というのも、ここにおいて物語はもはや「生気のない現在時 (présents inertes)<sup>(299)</sup> の継続」であることなく、その内的必然性の儘に「不可逆的な」一つの「生成」を必須の事態とするに至っているからである。

ムルソオの押さえ付けられた生の衝動は「宥め」られるどころか逆に鬱積することによって破壊的攻撃衝動に転化し、その放出を正当化する誘因を待ちうけていたのである。彼は時間を「神のことなどで無駄にしたくなかった」し、又「人から助けられるのは嫌いだ<sup>(300)</sup>」から司祭の訪問を四度続けて断っていた。従ってこの拒絶を押しやって来た司祭は始めから招かれざる客であり、司祭の「傍に来るように」という「誘」いにもムルソオは「拒絶<sup>(301)</sup>」を以て応える。司祭はムルソオにとって不快な、而も執拗に纏い付いて払い除けようのない不快な刺激源である。だから彼は司祭に「うんざり<sup>(302)</sup>」し始め、「少し昂奮<sup>(303)</sup>」し、次第に「彼〔司祭〕の存在が僕には重荷になり、苛立たし<sup>(304)</sup>」くなる。彼は「怒鳴り、苛々して」、司祭など「僕の父ではない、他人のひとりだ<sup>(305)</sup>」と言う。このようにして不快な刺激源としての司祭に対する破壊的攻撃衝動が徐々に活性化し、まさにその抑制が限度に達したところで、司祭は決定的な言葉を口にするのである。「私はあなたの身内です。たゞあなたは心が盲いているからそれが分らないのです。私はあなたのために祈ります<sup>(306)</sup>。」司祭はこのとき敵対的世界の象徴的存在としてムルソオの眼に映じた筈である。敵対的世界は「道徳上の怪物<sup>(307)</sup>」として人間社会から彼を追放し、「肌着を取り換える人達によってな

れたこと<sup>(308)</sup>によってその「真面目さを大きく阻害」されている判決を下し、それと「滑稽な不調和」をなす「判決の冷酷な施行」のもつ「人を馬鹿にした確実性」を受け容れることを強要し、刑の執行に当たっては精神的に「協力しなればならぬ」くさせ、遂には「犬」<sup>(309)</sup>のように「慎ましやかに、少しはにかみながら、極めて正確に殺されてゆく」という「運命」を与えた。あまつさえ敵対的世界はムルソオという一個の人格が恰も存在しなかったかのように、事態を糊塗すべく彼「になり代」って丁度「犬」に対する飼主のように、お前は畜生同様に「心が盲いて」真実が見えないのだから、代って祈ってやろうと言うのである。こうしてムルソオの実存はあらゆる点で「ゼロ」にされてしまう。自分の生命どころか、その「意味」<sup>(310)</sup>までも略取されてしまうのである。

それ故司祭に向けられた「大きな怒り」が果たすものとは、他者の歪曲から自己の人生の「意味」を救い出すこと、他者の「信念」<sup>(311)</sup>(conviction)・「確信」<sup>(312)</sup>(certitudes)の虚妄性を暴露することを通じて自己の「確たる」<sup>(313)</sup>(sûr)思いに客観的な形を与え、「ゼロ」という幻影的存在にまで眨められた自己の生に「現実性」を奪回し、「運命」を与えられたものから自ら「選択」した運命とすることである。ムルソオはこれまで「余計者」<sup>(314)</sup>として常に傍観者に終始し、言わば非社会的存在であった。しかし今や彼は「社会から離反している」<sup>(315)</sup>存在として、自らの反社会性を他者との対決の場における己が言動によって顕在化し客観化するのである。従ってこの「大きな怒り」はなによりも先ず暴力的であらざるをえない。その暴力性は、司祭の「法衣の襟を掴」み、看守達が司祭をムルソオの「手から引き離」して「脅か」<sup>(316)</sup>さざるをえない程の荒々しい拳動の上にも、又「他の人々もまた、いつか死刑を宣告されるだろう。彼〔司祭〕もまた死刑を言い渡されよう」という禍々しい、<sup>(317)</sup>託宣を伝える巫子にも似た威丈高な語調のうちにも確認される。そして、内省の果てに到達した「彼ら〔人々〕はもう僕と何の関係もない」という結論を司祭に明らかにすることによって、つまり司祭は「他人のひとり」<sup>(318)</sup>であり、「他人ども」は自分の「兄弟」<sup>(319)</sup>なぞではないと言いつつ、己が「孤独」を客観的なものとしたのである。だから

ここでムルソオが人間の世界は「僕と永遠に関係を断たれた世界」であると言うのは、単なる感慨の吐露ではなくして、客観的と言ってよい事実の確認なのである。こうして抑圧され破壊的攻撃衝動へと転化した生の衝動は死という出口の他なにもない所へとムルソオを駆ったのである。

だが別の見方をすれば、たとえ反社会的存在としてにせよ、ムルソオは司祭との対決において己が心と身体的一切を賭け自身的一切に責任をとる主体として立ち現われ人間的世界において紛う方なき自己を実現したのである。彼は「すべてに確信を持っている。僕の人生と来るべき死に対して確信を持っている。そうだ、僕にはそれしかない。しかし少なくとも僕はその真実に捕えられていると同時に、それを捕えている<sup>(320)</sup>」と言っている。司祭との対決を通じて、つまり人間的世界において、ムルソオは自己の内面と外面の一致した存在としての、「真実に捕えられていると同時に、それを捕えている」存在としての自己を実現したのである。その限りにおいて、破壊的攻撃性と見えたものは、人間的世界への関与としての攻撃性であり、正しく生の衝動(エロス)に統合された攻撃性であるのだ。それ故に「怒り」とともに「歎び」が語られているのである。生の衝動の抑圧から逆説的に生じた攻撃的衝動は理性のもくろみ通り自らの生の否定へとムルソオを導くとともに、同時に彼の生の実現へ、生の肯定へと導いたのである。己が生の実現にあたって、ムルソオの場合には、強制された死を己が選びとしての死にすることが必須の契機となっている。即ち生の否定が即生の肯定なのである。

かくしてムルソオのうちにあった生の肯定と生の否定の、身体と精神の対立は統合された。もはや精神は身体に対立する「風の意識」である必要はなくなった。それまで排除されていた眠りが、夜が、自然が蘇生する。「力が尽きたので、寝床に身体を投げ出した。眠ったらしい。眼が醒めると星が顔の上にあったから。」<sup>(321)</sup> その目覚めにおいて全感官の開放による自然的世界との交感が認められることは既に述べた通りであり、人間的世界は「僕と永遠に関係を断たれた」と言うことによって死の受容が表明され、他方で「すべてを生き直す気

持」を語ることによって生の肯定と生きることへの意志が表明され、自己と世界との全体的肯定の表明として「幸福」が語られるのである。

ブラウンによれば、「ただ抑圧されていない人間のみが、生と死に堪えうるほど強く、エロスをして統合を求めさせ、タナトスをして別離を保たせる<sup>(322)</sup>」、生と死の「再統合は平衡の状態、或いは完全な生命としての生命の休息であり、抑圧されず、したがってそれ自体に満足し、それ自体を変えることよりもそのままであることを肯定するものである<sup>(323)</sup>。」そして「欲求や欠乏を生じない行動は無目的である、したがってそれは遊びである<sup>(324)</sup>」、「永遠とは遊びの形式である<sup>(325)</sup>」、「抑圧されている生命のみが時間をもちうるのであって、抑圧されていない生命は、時間を持たない、または永遠の中に存在する<sup>(326)</sup>。」

翻ってムルソオをみるならば、彼もまた死の受容（タナトス）とともに「世界の優しい無関心に自分を開いた」（エロス）のであり、「解放」された「生命の休息」としての「憂愁に充ちた休戦<sup>(327)</sup>」の中で「自分が幸福であったし、今でもそうだ」と在るが儘の自己への「満足」と「肯定」を明言する。生の衝動を抑圧するとき「時間がない」という意識が生じたのであったが、抑圧が除去され「悪」が「浄化」された今は、恰も永遠に生きるかのように「すべてを生き直す気持になっている」と語る。だが、この「気持」からは「欲求や欠乏」に由来する「希望」も又「追放<sup>(328)</sup>」されているのである。「生き直す」とは、どのような形態の下においてであれ、生き延びることへの執着を示すものではなく、まさに「人生を繰り返すふり〔戯れ<sup>(329)</sup>〕」に止まるものである。

以上の如き見地から『異邦人』という物語を見直すとき、最終章末尾の「望めばよいのだった（il me restait à souhaiter〔下線は鈴木，以下同じ〕）」という文章の主動詞の過去時制（半過去）がその深い意味において了解される。ここで過去時制が用いられたのは文法的制約によるに過ぎないと言うこともできる。というのもこの末尾の文を含む一節はその全体が過去時制（複合過去と半過去）<sup>(331)</sup>で書かれているからである。しかしこの一節の最初の部分で「僕は眠ったと思<sup>(332)</sup>う（Je crois que j'ai dormi）」と現在時制が一箇所だけ使われている。この「思

っている「僕」は語り手ムルソオであるが、この「僕」は物語の時間軸上のどこに位置しているのか。それは語らるべきすべてを俯瞰している「僕」であり、死刑を間近に控えた「僕」であるだろう。とすれば、末尾の「僕」はこの語り手の「僕」と一致する筈であり、文法的制約を緩めるための工夫をして、現在時制で語り終えることもできたであろう。実際この最終章の冒頭部分の動詞の時制は現在形が支配的で、それに未来形すら加わっているが、語り手は「僕は何遍自問してみたことだろう<sup>(333)</sup>」という言葉<sup>(334)</sup>を回転軸として易々と過去時制に移行していくのである。

「すべてを生き直す気持になっている」とは、この世の「生とは縁を断った<sup>(335)</sup>」、自己の語られうる生を語り終えたということなのである。確かに「すべてが成就される<sup>(336)</sup>」ためには、普通の意味での時間は未だ残っている。しかしムルソオの主観にとっては、爾余の生は時間をもたない生、過去も未来も含まない生であり、従って物語の成立しない生なのである。又、人間の世界が彼にとって「永遠に関係を断たれた世界」であるならば、彼は無縁の衆生にこの上伝えるべき何をもつというのであろうか。この意味で、「ムルソオが語られている出来事を生き通した後に物語全体を書いたのだと推定する説<sup>(337)</sup>」ほど見当違いなものはないのである。

通常<sup>(338)</sup>の生の時間の在り方から見れば、ムルソオは確かにこの先刑場を見、「大勢の見物人」を目の当たりにし、その「憎悪の叫び」を耳にし、処刑台に身を横たえてもなお、なにほどこかの光景を目にするとと言える。だが彼はそのときもはや語ろうとは、伝えようとはしない筈である。彼は生の世界における万象の光と影の戯れを見詰め、これをすべての感官によって味わい尽し、「幸福」であることだろう。現在という時が、過去(「悪」)も未来(「希望」)も必要とせず、唯そのみのうちに生の全てが、生の充溢と幸福の一切が含まれていることであろう。「幸福だったし、今もそうだ」、つまり常に幸福だと言いうるためには、いついかなる時が終焉のときになろうとも、その一瞬間に生の全体が宿っていなければなるまい。だが過去も未来もないところに言葉が成り立つ筈がない。

言葉とは、過去から未来への架橋であるから。

『異邦人』のために準備され後に放棄された断章のひとつにおいて、語り手の死刑囚は処刑の寸前まで、現在時制を用いて、自己の意識の流れを語るようになっていた。<sup>(339)</sup>この事実からしても決定稿において結末に過去時制を選んだことの意味は、拙論の観点に立って初めて了解されうることなのである。もし現在時制で終えたならば、ムルソオにはなお、語られてはいないが語られうる未来が開けていることになろうからだ。

このようにして物語末尾の過去時制は、語られうる一個の人生の、一つの物語の完了を、回想されるムルソオと回想するムルソオの隔たりではなく回想するムルソオともはや回想しないムルソオとの「永遠に係わりを断られた」隔たりを示しているのである。人間の世界でこの後生きるのは、もはや語り終えたムルソオではなく、「新しいムルソオ」(un nouveau Meursault)<sup>(340)</sup>であるだろう。そしてこの後者のムルソオは、人間の世界に生きる限り、恰も未来があるかのように語り出す。つまりは後に語られうる出来事に充たされた一個の人生を歩み出す。かくしてこの作品の末尾は作品の冒頭へと連環する。しかしそれは『異邦人』という物語が死にゆくムルソオが綴った手記であるとか、「再び生き直す」場としての「文学的創造」<sup>(341)</sup>であるとかいう意味ででは決してない。別のムルソオが別の無垢の人生の展開とともに語り出すのである。この意味で、『異邦人』は生が永遠に回帰する世界なのだと言える。ムルソオという「道徳上の怪物」と呼ばれる特殊な人間の一生の含む「真実」は、人間の普遍的な「真実」でもあるということ、自分は「世間の人達と絶対に同じである」<sup>(342)</sup>というムルソオの主張によって、それとともに物語の構造そのものによって証すこと、ここに物語作者カミュの野心の一つがあったと言えるであろう。

このような解釈を施した後に、少なくとも一つの重大な疑念が浮かんでくる。一体犠牲者のアラブ人のことはどうなったのかと。

判決後のムルソオの思索のすべては既述の如く自己の死をいかにして受容しうるものとするかという一点に集中されていた。司祭に向けられた「大きな怒

り」の中で犠牲者のことが最終章では初めてムルソオの口に上るのであるが、それも「他人どもの死が〔……〕僕にとってなんだろう」、「人殺しで告発され、母の埋葬に泣かなかったから処刑されるとしても、それがなんだ<sup>(343)</sup>」と言っているだけであって、「何も僕にとっては重要性をもたなかった」ことの一つの例証としてもち出したに過ぎない。

第Ⅰ章最終章と第Ⅱ部最終章、とりわけアラブ人殺害と「大きな怒り」の場面は「読者とムルソオのこの上なく完璧な一体化（identification）の時<sup>(344)</sup>」であり、読者にとってはムルソオの心の真実は自明のことであるというような、恰も読者がムルソオ「になり代」りムルソオを「ゼロ」にすることが可能であるかのような驚くべきオブティシズムに立たない限り、アラブ人殺害も独房におけるその忘却も読者にとっては、ムルソオの主張にも拘らず、依然として「重要性」をもつ謎なのである。

既述のように死刑囚ムルソオの心境は最後の眠りを境として一変する。この眠り以前においては、「人生は生きるに価しない」と言い、司祭には「この馬鹿馬鹿しい人生<sup>(345)</sup>」と言って人生を否定していた。しかし「解放された」ムルソオは「再び生き直す気持になっている」と言って、人生を全的に肯定している。アラブ人殺害とその事実の忘却は、彼のこの対照的な二つの境地のそれぞれの文脈においてどのような説明を与えられうるであろうか。

「解放」前のムルソオの心理に則して見れば、「他人どもの死がなんだ」という言葉はある種の説得力をもっている。死ねばどうせなにもかも無に帰してしまふ、すべてが無益だ、なにをしたってよいではないかと。この場合には、彼の犯罪は人間の条件の一つである死という「馬鹿げた確実性」を「受け容れられない」者の抱く「大きな怒り」の爆発、「発作的な行為<sup>(346)</sup>」であると読者は了解することもできる。だがムルソオの言動の全体を客観的に見るならば、判決後の彼の関心の殆どが死をいかにして受容しうるかという点にのみ注がれていることを認めないわけにはいかない。「死刑執行」は「人間にとって真に興味のある唯一の事<sup>(347)</sup>」であると彼は言っているが、それというのも死刑が死をもたらすも

のであるからに他ならない。そして死刑執行の虞のある曙を前にして「犬の喘ぎに似」た呼吸をすることを知ると、何故彼が殺される瞬間の犠牲者の「恐怖」を想像しえないのか疑問になる。これも実在の死刑囚の心理に照らして了解するべきことなのか。ある調査によれば、調査対象の死刑囚のうち「半数は被害者<sup>(348)</sup>をごく稀にしか思い出さない」ということである。

「解放」後のムルソオの心境を背景として考えても彼のこの健忘症は芳しい評価を下されない。人間の条件に対する怨恨と反抗（「悪」）を「浄化」し、同時にあらゆる意味で生き延びることへの執着（「希望」）を「追放」した境地というものは確かに人間にとって理想的な境地の一つであり、そのようにして人間としての「すべてが成就される」という「幸福」をムルソオはもつのである。しかし、そうであるとすれば、犠牲者も又そのような「幸福」を語りうる「権利<sup>(349)</sup>」を有していたのだと言えるのではないか。

こうしてみるとムルソオを「倫理意識の欠如<sup>(350)</sup>」した殺人犯の典型として「分類済み<sup>(351)</sup>」にしたい誘惑に駆られるとしても無理はないだろう。検事も言っている、ムルソオは「社会の最も本質的な掟を認めない」、<sup>(352)</sup>「人間の心の最も基本的な反応を知らない」、<sup>(353)</sup>「道徳上の怪物<sup>(354)</sup>」であると。

例えば「攻撃的精神病質者」という犯罪者類型がある。この類型の特徴は、「他人の感情を無慈悲に無視すること」、「自己本位」、「衝動的」、「目的のためには必要とあらば暴力を使うことをためらわない」、「ほとんど悔恨の念を示さない」、<sup>(354)</sup>「嘘をつく傾向」などであり、更に「他の人間を人としてよりは物とみなすという強い傾向」があり、他人に加えるその暴力は「考えのないこどもの暴力に似ている」とも言われている。<sup>(355)</sup>ムルソオの言動を、自分の犯罪行為に対する反応に限定して、これらの性格特徴に照らし合わせてみると、一見したところでは彼はこの犯罪者類型に合致していると言えなくもないようである。彼が犠牲者の「感情」を一顧だにしていないことは明らかであるし、泉に達するという「目的」のために暴力を行使したと考えることもできるし、その犯行が彼の主張するように「太陽のせい」だとすると「衝動的」行為とも言えるし、犠牲

者の「身動きしない身体」<sup>(356)</sup>(corps inerte)は彼の目には「生気なき物体」(corps inerte)と映じていたことは明らかに思われるし、「間を置いて」更に四発の弾丸を撃ったことは「考えのないこどもの暴力」を連想させる。

しかしこの「まことしやか」な「証明」はこの犯罪者類型の特徴と符合しない唯一の事実の存在によって崩れるのである。即ちムルソオには、少なくとも意識的には、「嘘をつく傾向」がない。それどころか本当のことを、少なくとも自分にとって本当と思われることを言い過ぎる。攻撃的精神病質者が何故「どんな嘘でも」つくかと言えば、「真実を告げる義務を生じる人間関係を作り損った」<sup>(357)</sup>からであり、「誰かが本当に彼の価値を認める」ということを信じないから、反社会的行為によって失うものはほとんどないし、真実を語ろうとする動機は何もない」<sup>(358)</sup>からである。ところが拙論は第Ⅰ章において信義がムルソオの行動規範の中軸をなしていることを指摘したし、又本節においても司祭に向けられた「大きな怒り」の中に、「真実」を語ろうとするムルソオを、己れの反社会性という「真実」を赤裸に示すことによって逆説的に社会性を獲得しようとする彼の必死の姿を確認したのであった。この故に攻撃的精神病質者という類型によっては彼の犯罪とその忘却は説明し得ず、他の理由を索めなければならぬのである。

「人生は生きる労をとるに価しない」とムルソオは言う。何故ならば「来世」もなく、「記憶〔思い出〕」<sup>(359)</sup>(souvenir)も当てにならないとすれば、人は死によって「完全に無に帰する」ことになるからだ。そしてこの死は何人に対しても「宣告される」ものであり、「特権者しかいはしない」のだ。とすれば人間のすべての営為、「選ぶ人生、選択する運命などがなんだ！」すべてを虚無に帰する死という「たったひとつの運命」の「暗い息吹」をうけるとすべては「等しなみ」になり、「重要性」を失うのである。

とすると人間はいつでもどういう死に方をしようと同じことになる。生自体が「馬鹿馬鹿しい」<sup>(360)</sup>(absurde)ものなのだ。「人が死ぬ以上は、いつどのようにしてということは大した問題ではない。それは明らかなことだ。だから」ムルソ

オは処刑 = 死を受容すべきだと結論する。この推論の過程は既に幾度も見た通りである。

これはしかし果してムルソオが誇るような「論理」の名に値する論理であるのだろうか。直ちに二つの疑問が浮かんでくる。第一に果して死は「選択」を無効にし、人生のなにものも「重要性をもたない」ものにするであろうか。第二に、死は人間の営為をすべて「無に帰する」だろうか。

第一の疑問点について。司祭の「確信はどれをとっても女の髪一筋の値打もない」とムルソオは言い、セレストはレエモン「よりすぐれた〔価値のある〕人物」であるとも言っている。これは明らかに価値の主張である。それらが瑣末なことであると言うのなら、より端的に、何故彼は司祭に「大きな怒り」を向けるのかと問えるだろう。すべての陰蔽と歪曲から護り抜くべき「真実」が、黙して逝くことのできないものがあるからである。死がすべてを無に帰するという、何ものも「重要性をもたなかった」という事実、少なくともこのことは「重要性」をもつのである。司祭は「確信があるみたいだ」<sup>(361)</sup>が、自分こそ「すべてに確信」があると彼が言うのも、自分が「真実に捕えられていると同時に、それを捕えている」という、「真実」を体現しているという自負があるからである。より望ましい生き方というものがあるのだ。だから「僕はいつでも正しい」と主張し得る。<sup>(362)</sup>「正しいとされる」(justifié) 生き方とそうではない生き方とがあるのである。

どうしてムルソオは自分の主張を一貫しえないのだろうか。死は「選択」を無効にするというそもその前提が間違っているからである。事實は、むしろ死があるからこそ「選択」が意味をなすのである。「選択」とは常にこの私が選ぶということなのであり、私とは人間という個性を主張する有限な存在者についてのみ言われうることであるから、死は「選択」の必須の前提なのである。不死にして無限の存在たる神にも、私の死を語りえない犬の太郎にも「選択」はない。死すべき人間にして始めて「選択」の、自由の、つまりは固有の生の可能性が開けてくるのである。従って正しくムルソオの言う通り、「今であ

ろうと、二十年後であろうと、この僕が死ぬのには変りはない」のだ。しかし「人が死ぬ以上は、いつどのようにしてということは大した問題ではない」ということでムルソオが、生には限りがあり、いつどのようにして見舞う死であろうと死は死だと言わんとしているのならばその通りであるが、それは単に人間は元を糺せば四つ足の動物だという類の事実の確認に過ぎないのであり、それは「誰でも知っている」<sup>(363)</sup>ことであるが、「だから」人間が直立して歩き、道具を持ち、言葉を使うことが、つまり人間固有の生の内容をなすものが無意味になるとは誰も主張しないように、人はいつか死ぬ、「だから」、「人生は生きる労をとるに価しない」とは言えないのである。

第二の疑問点について。死は人間の常為の一切を「完全に無に帰する」か。無に帰するということは、人間がその死後「ゼロ」になり、その存在を証すどのような痕跡も残すことなく、恰も存在しなかったかのように「この先他の男達や女達が生きていく」<sup>(364)</sup>ということであろう。神も来世もない人間にとってはこの人間的世界がすべてであるが、その場合、個体の生の消滅が即個体の存在の消滅とならないようにするためにはどのような手立てがあるだろうか。

人は様々な仕方で自分の存在の形跡を残していく。むしろどんな痕跡も残さずに消えていくことの方が実際には難しいだろう。凡庸な人間の場合、己れの存在を証してくれるものは、血縁の他の人々の「記憶〔思い出〕」だろう。確かに人は天涯孤独の身となることもある、丁度ムルソオがそうであるらしいように。その場合、頼みの綱は「記憶」だけだ。「死んだのかもしれない」と思われるとマリーの「思い出」はもうムルソオの関心を惹かなくなつたように、人々はムルソオの死後彼のことを忘れてしまうこともあるだろう。しかし、「彼らはもう僕と何の関係もない」と言った後で、司祭に爆発させた怒りのさ中にサラマノを始めとする親和的世界の人々の大半をムルソオが想起したように<sup>(365)</sup>、「彼ら」が彼の死後、多分に歪曲を加えながらも、彼を想起しないとは言えない。又「頑なな魂」として、「道徳上の怪物」として、「心が盲いている」として、彼「の前に来た犯罪者達」<sup>(366)</sup>とは類を異にする犯罪者として注目を集めたムルソオ

は、史上類例なき兇悪犯として喧伝され世間の人々の記憶に残るであろうし、少なくとも殺人犯ムルソオの名は予審調書や公判記録といった公文書に、歴史にその名を留めることになる。

更に言えば、確かに天涯孤独の浮浪者が野垂れ死にしたとき、暫しの間、人の口の端に掛かることがあるにせよやがて忘れ去られてしまうということはある。だが人間の存在はその身体に限られない。丁度人は個体としては消滅しても子孫の肉体の組織のうちに無名の成分として生き残ると言えるように、人は人々の精神の中に否応もなくその無名の成分として生き残る。精神というものは、そもそも孤立したものとしてはその存在を考えることができないのである。身許不明のまま葬られた行き倒れといえども、その死に至るまでに全く人に接触しなかったということは不可能である。もしそうなら、育つことさえできなかったであろう。だから人は、「完全に無に帰する」ためには、逆説的だが、全く存在しないことつまり生まれて来ないことが必要なのである。

こうして今や読者は、「人生は生きる労をとるに値しないことは誰でも知っている」と断定するムルソオに対して、それは決して「誰でも」とは言えないと反駁することになるし、またムルソオの主張が間違っていることは「誰でもが知っている」と応酬することができるのである。<sup>(367)</sup>

では検事から「頭のいい男」と言われ、「言葉の価値を知っている」と評されたほどの男が何故このような似而非論理、詭弁を弄することになったのか。ムルソオが自ら言うように「真面目だった」とするならば、答は一つであろう。<sup>(368)</sup> 論理以前の感情がこうした似而非論理の「真実」性を彼に「確信」させたのである。そしてその「確信」に毫も逡遁するところが見えないとすれば、この感情は無意識のものであったということだ。この論理が、『神話』に説かれているような「死に至るまで貫かれた論理」<sup>(369)</sup>ではなく力尽くにも生を否定して彼を死に至らしめる論理であるとすれば、この論理は死に憑かれた論理、死の論理であって、このような論理を支える潜在的な情念とは、自己破壊の衝動の意味で

の、死の願望であると言えるだろう。

ここにおいて読者はまたムルソオの犯罪が何故の犯罪であり、その忘却が何故の忘却であるかという問題を解く一つの鍵を手にしたことになる。例えば、この犯罪は「間接自殺」<sup>(370)</sup>であると言ってもよいだろう。即ち殺人はムルソオの無意識裡に潜在する死の願望が勢みをつけるために待ち受けていた切っ掛け、一つの「偶然」に過ぎない。無意識の過程のなせる業であればこそ、合点のゆかぬムルソオの意識は「真の後悔」どころか「困惑」<sup>(371)</sup>を覚えるのであり、又根底において彼の心が死の願望に占められていてそれが心的エネルギーの殆どを吸い込むブラック・ホールになっているとすれば、被害者の死が「他人どもの死が〔……〕僕にとってなんだろう」というムルソオの言葉も了解可能と思われるのである。

## 2 死の願望と死の不安

シュナイドマンはハーマン・メルヴィルの「死の思考」<sup>(1)</sup>即ち死への関心の度合を計るために、メルヴィルの著作中に見出される死のテーマに係わりをもつ言説を次の五項目に別って数表化した。1) 主人公の死に関係する事柄、主人公による死を望む気持の表明・死についての思索・生命を危機にさらすような行動・自殺などへの言及。2) 主人公以外の人物の死に関係する事柄、前項と同じ内容への言及。3) 主人公以外の特定人物の死亡の事実への言及。4) 自然の中に現われた死、敵対的且つ破壊的な自然の諸相への言及。5) 死を主題とする理論的考察、死者を出した歴史的・事件への言及。<sup>(2)</sup>

『異邦人』における「死の思考」の度合をこの五項目に照らして調べてみる。但し、拙論の立場からして、この「死の思考」の主体は作者カミュではなく、語り手=主人公ムルソオである。1) ムルソオは死刑の判決を受け、さらに自ら上訴を放棄することによって刑死が確定する。その潜在的な死への願望の存在については前節で指摘した。死刑判決が下りてから刑務所付司祭が彼の激昂

を買いに至るまでを語る最終章の殆どは自らの死についての思索で占められている。彼はアラブ人達との流血の格闘に加わり自らの生命を危機にさらした。2) 養老院の「生命が消えつつある」<sup>(3)</sup> 在院者達。霊安室の「下疳」<sup>(4)</sup> を病む看護婦。「パリでは死者を三日、ときには四日も家における。ここでは時間がなくて、死んだということが納得ゆかないうちに、柩車のあとをつけて走らなければならぬ」と言う門番。失踪して「車に轢かれた」<sup>(5)</sup> かもしれない、人物ではないが物語の中で人物相当の役割を果しているサラマノの飼犬。「老衰は治りようがない」<sup>(7)</sup> と言うサラマノ。死は「おそかれ早かれ来るべきことだ」<sup>(8)</sup> と言い、「腕を切られ、唇を裂かれ」<sup>(9)</sup>、アラブ人を「ばらしちまおう」<sup>(10)</sup> と言うレエモン。「顔が血まみれになった」<sup>(11)</sup> アラブ人。3) ムルソオの母の死。エマニュエルの叔父の死。<sup>(13)</sup> サラマノの妻の死。<sup>(14)</sup> 被害者アラブ人の死。<sup>(15)</sup> さらに特定の人物ではないがその死が物語において重要な意味をもつものとして、ムルソオが獄中で読む新聞に載っている実の母と姉に殺された男の死、<sup>(16)</sup> 法廷で言及される父親殺し、<sup>(17)</sup> ムルソオの父が見に行った「ある人殺しの処刑」<sup>(18)</sup>、「病気かもしれないし、死んだのかもしれない」<sup>(19)</sup> マリー、「我々すべてが死刑囚なのだ」<sup>(20)</sup> と言い「まるで死人のような生活をしている」<sup>(21)</sup> 司祭。4) ムルソオの目に映る自然の「敵対的且つ破壊的」な諸相については前節の生否定的自然の項で詳述した。5) 最終章においてムルソオは死刑制度並びに死そのものについて一般的議論を展開し、それまで断頭台について抱いていた誤ったイメージの由来を問うて「1789年の大革命」<sup>(22)</sup> に言及する。

このように五項目に互って調べ上げると、ムルソオの「死の思考」の跡はその語りのうちに歴然としていると言える。一般に死に寄せる関心の強さは死の不安の強さの表われである。一方における自己破壊の意味での死の願望と他方における死の不安は一見矛盾するようであるが、実際には多分に表裏の関係にある。死の願望が潜在するが故に死の不安は昂まるのであり、死が脅威であればあるだけその魅惑も強い筈である。更に何故に死が人を惹き付けるものとなるのかといえ、人が人生に絶望し苦痛と苦悩しかもたらさない人生から

の解放を願うからであり、よりよき存在様態として死を想い描くからに他ならない。このよりよき存在様態が現身において可能と思われるや、直ちに死の蠱惑は消え失せる。つまり死の願望を支えるものは、逆説的に、よりよく生きることへの生への執着なのである。それ故死の願望のあるところには一般に死の不安もまた見出されることになる。

この死の願望と死の不安の相反的且つ相補的な関係の端的なイメージを、例えば『ボヴァリー夫人』の次のような一節が与えてくれる。「下から真っすぐに上ってくる光線が彼女〔エマ〕を身体ごと奈落に引き込もうとする。広場の地面は揺れながら壁にそっそもち上がり、床は縦揺れする船のように端から傾いてゆくと思われた。彼女はぎりぎりの縁に立って、広々とした空間に囲まれ、殆ど宙に浮いていると言えた。空の青さが彼女の身内に浸透し、風は虚ろな頭の中を駆け巡る。あとは誘いのままに身を委ねるだけのことだった。その間も轆轤の唸りは絶え間なく、彼女を呼び寄せる荒れ狂う叫び声のようだった。〔……〕間一髪で死を免れたところなのだと思うと、恐怖で彼女は気が遠くなりかけた。」<sup>(23)</sup>

このような死の「誘い」と死の「恐怖」の瞬時のうちの闘ぎ合いを経験した人は多いことだろう。エマのこの突然の死の願望の昂まりは、恋人ロドルフの別れを告げる手紙を読んで、体よく棄てられたのだと悟った直後に起っている。この一節のすぐ前で、エマは男の手紙を読み返しつつ、「男の姿が見え、声が聞こえ、彼女は男を両の腕でしっかりと抱いた (entourait)」<sup>(24)</sup>のであった。愛の対象の喪失が、生きることへの絶望が死に魅惑を付与したのである。そして、死の誘惑がその頂点に達したとき、彼女と世界の係わりが彼女にどのように表象されているかといえ、彼女は「広々とした空間に囲まれ (entourée)」<sup>(24)</sup>ているのであり、「空の青さが彼女の身内に浸透し、風は虚ろな頭の中を駆け巡る」のである。つまり対象が特定の間人(ロドルフ)から自然(空間、空、風)に置き換えられただけで、そこに目差されているものは同一の事態である。即ち合体の陶醉のうちに「身を委ねる」ことである。それがエマにとっ

ての生きることの内容であり目的なのである。だからこの望みの実現が現身においては不可能となったと知ると、彼女はこれを我知らず死のうちに投影したのである。死はこうして彼女を魅惑する魔力を帯びる。生の衝迫と死の衝迫が刹那の錯覚のうちに重なり合うのである。ここでの意識の働きは両義的である。それは死=生という幻想の最も昂揚するとき「虚ろな頭」として後退するが、それでも「間一髪」のところで彼女を押し止め、他方ではその際どさ故に死の魅惑を一層引き立たせる。しかしそれも無意識の過程の呪縛力が弱まり、意識がその支配を回復するにつれ死の「恐怖」が全景を占めるに至るのである。

この死の願望と死の不安の相剋するエマの心理の描写が性愛のイメージに充ちていることは論ずるまでもあるまい。エマにおける合体の理想とは、性愛的合体なのである。生の本能（エロス）を構成する四要素（自己保存の衝動・攻撃性・性の衝動・情愛性）のすべてがその関与を外界から撤去し、内界へ転じたのである。生の理想とするところによって死を彩り、生の現実に生きることを拒否すること、これも否認の機制の一つである。ロドルフという愛の対象の喪失の認識はあり、対象は捨てられるが、しかしこの失われた対象に向けられた情愛性と性の衝動の布置そのものは変えられることなく、そのまま想像界へと転移されたのである。本来外界を志向し、現実を切り拓いていくべき攻撃性は、現実への否定として現われ、更に現実への回路としての自己の身体への否定としても働くに至る。そして生の現実を否認し想像的生としての死のうちによりよき生への活路を幻想させる心の術策によって自己愛的自己保存の衝動も充たされるかに見える。もはや自殺か発狂だけがエマを待つのみである。彼女をこの破局から救うものは、現実を危ういところで手離さない一片の醒めた意識の存続であり、この意識の残る限り完全には錯誤の道に陥ることのない自己保存の衝動なのである。

さて、ムルツオにおける生の理想が合体の陶醉であるや否やは後に論ずるところであるからこれは暫く措くとしても、前節で明らかになったように、少な

くとも彼には一方で潜在的な死の願望が推定されるとともに、他方では生の歓びを十全に堪能しうる豊かな感受性をもち生への強い執着を示していることを指摘しうる。生に執着しつつも死を願望するとすれば、彼を生に繋ぎ止める死の不安もまた強烈であるに違いない。そしてエマが自分の死にたい気持を自覚しあからさまな死の不安に苛まれるのと相違して、死の願望が無意識裡に止まっているムルソオにあっては、死の不安も又彼自身にはそれと気付かれない形をとって表われているに違いない。

死は個体にその身体を回路として訪れるものであるからには、死の不安は先ず身体に係わる不安として現われるであろう。ムルソオが自他の身体に対してもつ意識の諸相を記述することによって、彼の死の不安を浮かび上がらせることができるに違いない。

ムルソオは自らの身体の異常感をしばしば訴えており、それは心氣的愁訴とすらも言えるほどであり、そこから彼の心身両面に互るある種の脆弱さが推定されるのであると前節で述べた。これを身体についての意識の次元に限定して言い換えると、彼は自分の身体を傷つき易いものと、「劣った身体」<sup>(25)</sup>と見做していると、「自分の身体の統合性についての根元的な不信」<sup>(26)</sup>をもっていると推定されるということだ。

人が自分の身体についてもつイメージは一般に抽象的なものである。自分の身体をありの儘に見るならば、人はそこに変化を認めざるをえなくなる。自分の身体にまったく不安が無いか少ない者はこの変化を成熟と、望ましい変容と見做し得るであろう。だがそこに強い不安を抱く者には、変化は即凋落と死の表徴と映じるので、彼の身体概念は尚更抽象的にならざるをえない。

自分の身体の変化を否認するには自分の身体のイメージから具体的属性を能う限り捨象しておけばよい。そして自分の身体の鏡となる他人の身体像に関してもその抽象性を保持するために、そこに視線を注がないようにすることである。ところが死の不安つまり身体の変形への強い関心は抑圧されるとそれだけ一層増幅されるのであり、人は対象の変形と異形を我知らず注視しないではい

られないのである。そのとき他の身体の変形が暴かれれば暴かれるだけ自分の身体の同一性の幻想は強化されるのである。他人の身体の変形や異形は、身体の障害、異常性、老化、異人種の身体、そして死体のうちに追求される。

又「生物一般にとっては、生命とは永遠なるものであって、死の可能性を宿してはいないのである。死が真に死として問題になるような身体とは〔……〕一般的概念の任意に交換可能な範例としての生命的身体ではなくて、個別としての意味を有する身体、いいかえれば歴史をもつ身体にかぎられる（傍点は原著者<sup>(27)</sup>）」のであるから、死の不安の強い者は自分の歴史性を否認しようとするであろうし、自分が安んじて心身を開きうる他者のもつ身体とは歴史性を捨象された「生命的身体」ということになる。

以下ムルソオが自分の身体についてどのように表象しているか、他の身体の変化と異形をどのように見ているか、彼のもつ身体イメージのうちに「生命的身体」が確認されるかどうか検討しよう。更に死の不安の淵源をなすもの一つは分離不安であるという観点から、彼の身体意識を構成する共感的共生的要素を析出し、最後に死の不安と死の願望の観点に共生的性格の人間に親和性をもつ気分様態としてのメランコリーの観点を加えて、彼の犯行に至る過程と犯行前後の心理の解釈を試みて次節への橋渡しとしよう。

## A. ムルソオの身体像

ムルソオ自身によって、更に他の登場人物達によってムルソオの身体の外観はどのように知覚されているかという設問を前にして、読者は途方に暮れざるをえないだろう。というのも語り手は既述のように外界の対象については鋭い観察力と豊かな感覚印象を以て詳細に記述しているけれども、自分自身の身体を外側から読者に眺めることを許すような具体的な資料を殆ど呈示していないのである。

先ずムルソオの年齢が定かでない。養老院長によって「若い<sup>(28)</sup>」と言われ、彼自らも「若い<sup>(29)</sup>」と言っている。又法廷で見掛けた「〔他の新聞記者達に比して〕

はるかに若い」新聞記者の凝視をうけて「自分自身に見詰められているような滑稽な印象をもった」と言っている。<sup>(30)</sup>

次に彼の背格好を窺う手掛りになる服装についてはどのように叙述されているか。母の葬式の日には彼は「黒ネクタイ」と「腕章」<sup>(31)</sup>をつけ、「黒服」<sup>(32)</sup>を着、「帽子をもっていなかったのでハンカチで扇いだ。」<sup>(33)</sup>海辺でマリーに再会したときは「黒ネクタイ」を身につけていて彼女を驚かす。<sup>(34)</sup>アラブ人達と遭遇することになる浜辺では「ズックの靴」を履き「無帽」であった。犯行の寸前彼は「ズボンのポケットの中で拳を握りしめ」、<sup>(36)</sup>「上着の中でレエモンのピストルを握りしめた。」<sup>(37)</sup>逮捕後弁護士に会ったときに「上着を脱いでいた。」<sup>(38)</sup>刑務所に入れられたとき「ベルト、靴紐、ネクタイ」を取り上げられた。以上がムルソオの服装への言及のすべてである。ごくありふれた物ばかりの上それらを個性化するなんらの限定も受けておらず、これでは彼の姿形を想像するになんの足しにもならない。他の登場人物の服装は一般によく観察されており、更に例えば弁護士に初めて対した折りに「彼は黒っぽい服を着て、端を折り返したカラーに、太い白黒の縞の入った奇妙なネクタイをしていた」<sup>(40)</sup>と言っていることからムルソオが服装に無頓着・無趣味であるとは思われず、むしろ「彼女〔マリー〕は美しい赤白の縞の服を着て、革のサンダルを履いていた」<sup>(41)</sup>とか、日曜日と一緒に海水浴に行くときのレエモンの出立ちを見て「彼は青のズボンと、半袖の白シャツを着ていた。しかし麦藁帽子を被っていたので、マリーは笑い出した」<sup>(42)</sup>と言っていることから服装について一通りの趣味をもっていることが窺えるのである。つまり語り手は、他の登場人物の服装については自らの趣味基準に従って詳細な観察と批評を加えながら、自分自身の服装については極力言及を控え、已むを得ずする場合にも、ごく無個性な物に限って無限定な儘呈示しているということである。

彼の肢体・容貌・声音・表情への言及についても同様のことが言える。葬式の翌日ムルソオは「髭を剃っ」<sup>(43)</sup>た。マリーに「あたしあなたより日に灼けている」<sup>(44)</sup>と言われる。ベッドの中のマリーとムルソオの「日に灼けた身体。」<sup>(45)</sup>犯行

当日の朝マリーに「むっつりした顔<sup>(46)</sup>」をしていると言われる。予審中の独房の中で彼は「鉄製の碗」に映る己が顔の「真面目な表情」,「相変らず厳しい悲しそうな様子」に気付くとともに、独り言を言っている「自分の声音をはっきりと聞いた。」<sup>(47)</sup> 又判決後の独房の中で「自分の呼吸が聞えて、それがぜいぜい、犬の喘ぎに似てくる」と語っている。<sup>(48)</sup> ムルソオの身体の外観を想い浮かばせる具体的な手掛りとしては、物語全体に亘っても唯一つだけ、ムルソオ自ら自分に似ていると言っているように思われる若い新聞記者の「少し左右の均齊の欠けた顔」と「非常に薄い色の眼」である。<sup>(49)</sup> これは間接資料であり、これが即ムルソオ自身の肖像でもあるとするには語り手の言い様はなお曖昧である。対照的に他の登場人物達の容姿や表情は概して詳細に観察されている。例えば語り手は初対面の予審判事について「彼は青い窪んだ眼をした、繊細で整った顔付の男で、背は高く、長い灰色の口髭と殆ど白い豊かな髪の主だった。いかにも分別がありそうで、時々、神経的に口の端を引き攣らす癖はあったが、結局、<sup>(50)</sup> 感じの好い男だった」と述べている。

結局、語り手が呈示する資料によって読者が再構成しうる主人公ムルソオの身体像は能う限り抽象的なものであり、そこに語り手が許容する限定としては唯「若い」ということだけなのである。一方で身体の不安感の頻繁な表明と照らし合わせると、この己が身体から外面的特徴を能う限り消去しようとする態度には、自分の身体の対象化を忌避し、変化つまり老化と死という人生の現実を否認したいという願望が潜んでいると推察されるのである。

『異邦人』に確認される二重身 (Doppelgänger) のモチーフはこうした推定の傍証となるものである。先述のようにムルソオは法廷で若い新聞記者を見掛け「自分自身に見詰められているといった、滑稽な印象をうけた」と言っているが、これは二重身の体験と言えよう。周知の如く、二重身は「無気味な死の前触れ」であるという伝説があり、その通りムルソオは同じ法廷で死刑の判決を受けることになるのである。二重身体験はこのように死の予感と不安の所産であるが、それとともに「永生〔再生〕」への願望の、「無限の自己愛、原始的自

己愛」の表われでもある。<sup>(51)</sup> ムルソオは死を間近に控えて「新しいムルソオ」について語る。更に、現在時制と未来時制を交えて日記風に語るかと思えば、すべてを死を控えた時点から回顧的に語るというように、時間軸の上を自在に行き来し得る語り手の身体こそ、時間の外にある、死を免れた、あるいは免れようとする身体なのである。

〔注〕

第1節

- |                                    |  |
|------------------------------------|--|
| (204) <i>Ibid.</i> , pp. 105-109.  | (231) <i>Ibid.</i> , p. 113.   |
| (205) <i>Ibid.</i> , p. 105.       | (232) <i>Ibid.</i> , p. 112.   |
| (206) <i>Ibid.</i> , p. 107.       | (233) <i>Ibid.</i> , pp. 114-115.  |
| (207) <i>Ibid.</i> , p. 150.       | (234) <i>Ibid.</i> , p. 140.   |
| (208) <i>Ibid.</i> , p. 107.       | (235) <i>Ibid.</i> , p. 147.   |
| (209) <i>Ibid.</i> , p. 108.       | (236) <i>Ibid.</i> , p. 148.   |
| (210) <i>Ibid.</i> , p. 29.        | (237) <i>Ibid.</i> , p. 109.   |
| (211) <i>Ibid.</i> , pp. 110-111.  | (238) <i>Ibid.</i> , p. 158.   |
| (212) <i>Ibid.</i> , pp. 161-162.  | (239) <i>Ibid.</i> , p. 161.   |
| (213)-(214) <i>Ibid.</i> , p. 162. | (240) <i>Ibid.</i> , p. 159.   |
| (215) <i>Ibid.</i> , pp. 10-11.    | (241) <i>Ibid.</i> , p. 158.   |
| (216) <i>Ibid.</i> , p. 20.        | (242) 養老院へ行くバスの中で「殆んど全行程を眠ってしまった。」( <i>Ibid.</i> , p.10.)  |
| (217) <i>Ibid.</i> , pp. 20-21.    | 霊安室では他の者達に先んじて「眠くなってきた」(p.15.), 「少しうとうとしたようだった。」(p. 18.) 葬行の途次, 「少し気を失いかけた。」(p. 28.)   |
| (218) <i>Ibid.</i> , p. 21.        | 「ひどく疲れて, 眠かった」(p. 94.) ので埋葬の委細については「もう何も思い出せない。」(p. 29.) マリーと一緒に「半ば眠りながら, 浮標の上にいた。」(p. 32.) 海辺で「彼女の身体と太陽の熱で少し眠った。」(p. 77.) 砂浜をレエモン, マソンと一緒に歩いていて, 「帽子のない頭に日光をうけて |
| (219) <i>Ibid.</i> , p. 71.        |  |
| (220) <i>Ibid.</i> , p. 113.       |  |
| (221) <i>Ibid.</i> , p. 159.       |  |
| (222)-(223) 森山, 前掲書, p. 167.       |  |
| (224) 『異邦人』, p. 170.               |  |
| (225) <i>Ibid.</i> , p. 147.       |  |
| (226) <i>Ibid.</i> , pp. 34-39.    |  |
| (227) <i>Ibid.</i> , p. 51.        |  |
| (228) <i>Ibid.</i> , p. 67.        |  |
| (229) <i>Ibid.</i> , p. 68.        |  |
| (230) <i>Ibid.</i> , p. 84.        |  |

- 半分眠っていた。」(p. 79.) 犯行時に  
 は、「もう太陽のシンバルを額に感じ、  
 短刀からふき出す光った剣を眼前にぼ  
 んやり感じるだけだった〔……〕すべ  
 てがゆらめいた。」(p. 88.) 法廷で  
 「周囲と自分自身について意識を少し  
 とりもどした。」(p. 126.) 同じく法  
 廷で、「しまいに僕はその日の午前の  
 暑さしか感じなくなった。」(p. 144.)  
 「何もかも色の褪せた水に似たもの  
 になってしまい、そこで眩暈を感じるよ  
 うな印象をうけた。おしまいは、〔…  
 …〕を思い出すだけで。」(p. 148.) 独  
 房で、司祭が「ながいことじっとして  
 いた」とき「あまりに長いので、僕は、  
 一時のあいだ、彼を忘れたような気が  
 した。」(p. 163.)
- (243) 「疲れた」(fatigué) を基本とし、  
 その他の場合は〔 〕内にその語を示  
 す。〔第〕I〔部〕-〔第〕I〔章〕, pp. 20,  
 21, 28 [fatigue]; I-II, pp. 32, 38  
 [fatiguer]; I-III, p. 51; I-VI, pp.  
 72 [fatigue], 76; II-I, p. 94; II-III,  
 pp. 126, 137 [fatigue]; II-IV, p. 149.  
 第II部最終章では、「僕は力尽きた」  
 (j'étais épuisé) [p. 171.] と言われて  
 いる。épuisé は疲労を表わす言葉と  
 しては fatigué よりも強い表現の言  
 葉であるが、ここでは単に「力尽きた」  
 ということであって、この場合は心気  
 的訴えととることはできない。
- (244) *Ibid.*, p. 160.  
 (245) *Ibid.*, p. 169.  
 (246) *Ibid.*, p. 160.
- (247) *Ibid.*, p. 170.  
 (248) *Ibid.*, p. 169.  
 (249) 『神話』, p. 73.  
 (250) *Ibid.*, p. 64.  
 (251) 『神話』, p. 146.  
 (252) 『異邦人』, p. 169.  
 (253) *Ibid.*, p. 160.  
 (254) *Ibid.*, p. 170.  
 (255) *Ibid.*, p. 171.  
 (256) *Ibid.*, p. 154.  
 (257) Jean-Paul Sartre: *Explication de  
 L'Etranger*, in *Les critiques de no-  
 tre temps et Camus*, Garnier, 1976,  
 p. 47.  
 (258) Albert Camus: *L'envers et l'en-  
 droit*, Gallimard, 1958, p. 77.  
 (259) 『異邦人』, pp. 158-159.  
 (260) *Ibid.*, p. 112.  
 (261) *Ibid.*, p. 164.  
 (262) *Ibid.*, p. 168.  
 (263) *Ibid.*, p. 166.  
 (264) *Ibid.*, p. 154.  
 (265) *Ibid.*, pp. 153-154.  
 (266) *Ibid.*, p. 161.  
 (267) *Ibid.*, p. 155.  
 (268) *Ibid.*, p. 160.  
 (269) *Ibid.*, p. 156.  
 (270) *Ibid.*, pp. 157-158.  
 (271) *Ibid.*, p. 67.  
 (272) *Ibid.*, p. 147.  
 (273) *Ibid.*, p. 169.  
 (274) *Ibid.*, p. 160.  
 (275) *Ibid.*, p. 161.  
 (276)-(277) *Ibid.*, p. 160.

- (278) 森山, 前掲書, p. 167.
- (279) 『異邦人』, p. 152.
- (280) *Ibid.*, p. 158.
- (281) *Ibid.*, p. 161.
- (282) *Ibid.*, p. 109.
- (283) *Ibid.*, p. 160.
- (284) *Ibid.*, p. 168.
- (285) *Ibid.*, p. 162.
- (286) *Ibid.*, p. 169.
- (287) *Ibid.*, p. 116.
- (288) *Ibid.*, p. 99.
- (289) *Ibid.*, p. 168.
- (290) *Ibid.*, p. 162.
- (291) *Ibid.*, p. 165.
- (292) *Ibid.*, p. 135.
- (293) *Ibid.*, p. 131.
- (294) *Ibid.*, p. 164.
- (295) *Ibid.*, p. 135.
- (296) 加賀乙彦『死刑囚の記録』, 中央公論社, p. 75.
- (297) サルトル, 前掲書, p. 56. なおこの箇所((299)を含む)の訳は人文書院刊, サルトル全集『シチュアション I』に従っている。
- (298) M.-G. Barrier: *L'Art du Récit dans l'Etranger d'Albert Camus*, Nizet, 1966, p. 16. 「カミュ自身はいつもこの作品を小説と呼ぶことを拒んできた。」
- (299) サルトル, 前掲書, p. 56.
- (300) 『異邦人』, p. 164.
- (301) *Ibid.*, p. 162.
- (302) *Ibid.*, p. 165.
- (303) *Ibid.*, p. 166.
- (304) *Ibid.*, p. 167.
- (305)-(306) *Ibid.*, p. 168.
- (307) *Ibid.*, p. 136.
- (308) *Ibid.*, p. 154.
- (309) *Ibid.*, p. 159.
- (310)-(311) *Ibid.*, p. 99.
- (312)-(313) *Ibid.*, p. 169.
- (314) *Ibid.*, p. 120.
- (315) *Ibid.*, p. 144.
- (316)-(318) *Ibid.*, p. 170.
- (319) *Ibid.*, p. 172.
- (320) *Ibid.*, p. 169.
- (321) *Ibid.*, p. 171.
- (322) ブラウン, 前掲書, p. 115.
- (323) 同書, p. 100.
- (324) 同書, p. 105.
- (325) 同書, p. 106.
- (326) 同書, p. 102.
- (327)-(329) 『異邦人』, p. 171.
- (330) *Ibid.*, p. 172.
- (331) *Ibid.*, p. 171.L.1-p. 172.L.8.
- (332) *Ibid.*, p. 171.L.3.
- (333) *Ibid.*, p. 152.
- (334) この最終章冒頭部分の現在時制と未来時制の使用を根拠として, この部分が物語の時間軸の上で一番最後に位置すべきものであるとする解釈がある(B.T. Fitch: *Narrateur et narration dans L'Etranger d'Albert Camus*, deuxième édition, Minard, 1968, p. 19.)が, そうした拘り定規な形式論理ではこの作品の真の物語構造は把握しえない。この冒頭の部分では, 語り手は「今後に興味があるのは,

唯メカニズムの運行から逃れること、不可避にどこか抜け道があるかどうかを知ることだ」(p. 152.)と述べているが、末尾のムルソオはすべてこうした問題に対して一応の解決を見出しているのである。この最終章冒頭の未来形混じりの現在形主体の一節は、第Ⅰ部第Ⅰ章の現在形とりわけ未来形の使用が際立つ文体に対応している。後者においても、語り出しの部分の「僕は社長に二日の休暇を要求した」(p. 9.L.2-3.)という言葉を手軸に語り手は易々と過去時制主体の語りに入っていくのである。この対応関係は作者カミュが『異邦人』全体に互り、その様な水準において工夫を凝らして嵌め込んだ「対句法 (parallélisme)」(『創作集』, p. 1932.) の一つの表われなのである。

- (335) 『創作集』, p. 390.  
 (336) 『異邦人』, p. 172.  
 (337) バリエ, 前掲書, p. 26.  
 (338) 『異邦人』, p. 172.  
 (339) Albert Camus: *Carnets I*, Gallimard, 1962, pp. 143-144.  
 (340) 『異邦人』, p. 170.  
 (341) P. Viallaneix: *Le Premier Camus in Cahiers Albert Camus II*, Gallimard, 1973, p. 116.  
 (342) 『異邦人』, p. 95. 自分は考え方においても行動においても人並みなのだというムルソオの固定的ともいえる観念は、このように直接的に「世間の人達と同じように」(comme tout le monde) [pp. 95, 97, 153.] という言葉と

して現われている他、「すべての人間は」(tous les êtres) [p. 94.] とか、「誰しものが」(tout le monde) [pp. 160, 170.] とか、さらに「[一般に] 人は」(on) [pp. 33, 64.] という表現としても現われている。

- (343) *Ibid.*, p. 170.  
 (344) フィッチ, 前掲書, p. 69.  
 (345) 『異邦人』, p. 169.  
 (346) *Ibid.*, p. 141.  
 (347) *Ibid.*, p. 155.  
 (348) 小木貞孝『死刑囚と無期囚の心理』, 金剛出版, p. 91.  
 (349) 『異邦人』, p. 171.  
 (350) 小木, 前掲書, p. 71.  
 (351) 『異邦人』, p. 101.  
 (352) *Ibid.*, p. 145.  
 (353) *Ibid.*, p. 136.  
 (354) A. ストー『人間の攻撃心』, 高橋哲郎訳, 晶文社, pp. 154-155.  
 (355) 同書, p. 161.  
 (356) 『異邦人』, p. 88.  
 (357) ストー, 前掲書, p. 155.  
 (358) 同書, p. 161.  
 (359) 『異邦人』, p. 162.  
 (360)-(362) *Ibid.*, p. 169.  
 (363)-(364) *Ibid.*, p. 160.  
 (365) *Ibid.*, p. 170.  
 (366) *Ibid.*, p. 100.  
 (367) 『神話』の著者としてのカミュは同じく人生には死があるという出発点に立ちながらも、ムルソオとは反対の結論に達している。例えば、「どのような深さ、どのような感動、どのような情

熱, どのような自己犠牲があろうと, 四十年の意識的な生涯と六十年に亙る聡明な眼差しとが, 不条理な人間の眼に等しいものとして映ることは, (たとえ彼がそう願ったとしても) ありえないであろう。〔……〕その差の二十年間の生と経験は, もはや決して, 他のなにものによっても置きかえられぬであろう。』(『神話』, pp.87-88.)

ここでムルソオの次の如き言葉が想起される, 『今であろうと, 二十年後であろうと, 僕が死ぬことには変わりはない

のだ。ここでこの先二十年の生活を考えただけで, 僕の心かはげしく躍るのが感じられ, 僕の論法は少し妨げられた。しかしそれは, 二十年後にやはりそこへ行かなければならなくなったとき, どんなことを考えるかを想像して, 窒息させてしまえばよかった。』

(『異邦人』, p.160.)

(368) 『異邦人』, p.115.

(369) 『神話』, p.22.

(370) バンゴ, 前掲書, p.89.

(371) 『異邦人』, p.101.

## 第2節

(1) E. S. シュナイドマン『死にゆく時』, 白井徳満他訳, 誠信書房, p.218.

(2) 同書, pp.215, 216, 219. 但し拙論本文の五項目はシュナイドマンのそれに若干の整理を加えたものである。

(3) Albert Camus, *L'Etranger*, Gallimard, p.171. 以下『異邦人』と略記。

(4) *Ibid.*, p.14.

(5) *Ibid.*, pp.15-16.

(6) *Ibid.*, p.68.

(7) *Ibid.*, p.69.

(8) *Ibid.*, p.51.

(9) *Ibid.*, p.81.

(10) *Ibid.*, p.83.

(11) *Ibid.*, p.80.

(12) *Ibid.*, p.9.

(13) *Ibid.*, p.10.

(14) *Ibid.*, p.68.

(15) *Ibid.*, p.88.

(16) *Ibid.*, p.114.

(17) *Ibid.*, pp.120, 144.

(18) *Ibid.*, p.155.

(19) *Ibid.*, p.162.

(20) *Ibid.*, p.164.

(21) *Ibid.*, p.169.

(22) *Ibid.*, p.157.

(23) G. Flaubert: *Madame Bovary*, Cornard, 1921, p.285. なお, 訳出にあたっては新潮世界文学9『フローベール』収録の生島遼一訳を参照した。

(24) *Ibid.*, p.284.

(25) S. フィッシャー『からだの意識』, 村山久美子・小松啓訳, 誠信書房, p.110.

(26) 同書, p.36.

(27) 木村敏『自覚の精神病理』, 紀伊國屋書店, p.161.

(28) 『異邦人』, p.12.

(29) *Ibid.*, p.110.

(30) *Ibid.*, p.122.

(31) *Ibid.*, p.10.

- (32) *Ibid.*, p. 26.
- (33) *Ibid.*, p. 27.
- (34) *Ibid.*, p. 33.
- (35) *Ibid.*, p. 79.
- (36) *Ibid.*, p. 85.
- (37) *Ibid.*, p. 86.
- (38) *Ibid.*, p. 93.
- (39) *Ibid.*, p. 111.
- (40) *Ibid.*, p. 93.
- (41) *Ibid.*, p. 53.
- (42) *Ibid.*, p. 72.

- (43) *Ibid.*, p. 32.
- (44) *Ibid.*, p. 33.
- (45) *Ibid.*, p. 55.
- (46) *Ibid.*, p. 71.
- (47) *Ibid.*, pp. 115-116.
- (48) *Ibid.*, p. 159.
- (49) *Ibid.*, p. 122.
- (50) *Ibid.*, p. 92.
- (51) S. フロイト『無気味なもの』, 高橋義孝・池田紘一訳, 改訂版フロイド選集第7巻収録, 日本教文社, p. 295.